

中国、中医学院との学术交流
(平成19年8月23~27日)

中国吉林大学白求恩医学部参観・講演及び
遼寧中医学院参観

半身症候鍼灸法研究会代表 茂木 昭



白求恩医学部基礎学部



歓迎日本国横浜周気堂針灸専門家
茂木 昭院長来我院参観訪問

白求恩医学部

去る2007年8月23日から25日にわたり吉林大学白求恩医学部鍼灸科の訪問とその交流を行った。第2臨床医学院の壁面には、わたしの名が印刷された歓迎の横断幕が大きく張られていた。

白求恩医科大は数年前吉林大学に合併し吉林大学白求恩医学部となったが、戦前から日本とのかわりが深く現在も日本の各医科大学との

交流を盛んに行っている。

わたしはかつて1983年5月に長春市、白求恩医科大鍼灸科にて行われた第2次訪中鍼灸研修団に参加しているが、その後、鍼灸法と手技治療法、筋肉反射テスト法の小生監修のビデオ、DVD及び拙著が李 鷺教授を通じ現在吉林大学の図書館に収蔵され、鍼灸科で参考に供されているということである。また兼ねて聞いていた医大訪問の意向があれば白求恩医科大としていつでも歓迎したいとの李 鷺教授の話を受け、今回24年ぶりに念願の訪問、交流を行うことができた。更に帰路、瀋陽の遼寧中医薬学院にも参観した。

白求恩医学部臨床医学院は第1院から第3院まであり、第3臨床医学院は戦後に日本の援助で建設された病院といわれている。

戦前の偽満州国(中国ではこう称している)時代の大きな建造物が目立っていた当時とは異なり、他の主要な都市同様に高層建築物が目につく。数次にわたった白求恩医科大訪中鍼灸研修団に共に参加された方々にとって、思い出深い長春の美しい広い街路も高層ビルが立ち並ぶ景観に変貌していた。

今回わたしが訪問することで、退職されていた李 鷺教授もわざわざその期間の午前中、第2臨床医学院へ出向き臨床を見学させていただいた。



李 鷺 教授の臨床



前列右から二人目、趙吉光 第二臨床医学院院長

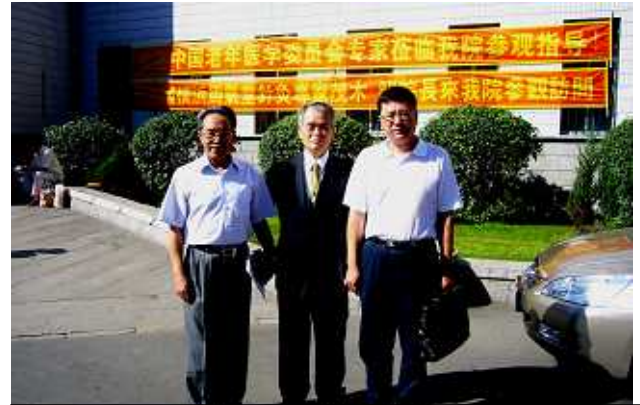
第一日目は第2臨床医学院の趙吉光院長はじめ2院での主要な医師からの歓迎の会見の場が用意された。

前回のときは、第1臨床医学院鍼灸科では低周波通電による置鍼を行う現代医学的鍼灸法が採用され、第2臨床医学院鍼灸科では、古典重視の中医学鍼灸法が採用されていた。滞在中、我々は当時中国で流行していた鍼麻酔による甲状腺腫手術2例を見学した。

文革終焉からまだ左程経っていない時期で、中西合作医療が国策に挙げられ、特に第1臨床医学院ではその意向が強かったようである。わたしは当時、多くの中医鍼灸医師のなかで李鷺先生の臨床技術に最も注目していた。

今回の、わたし個人での訪問では3日間にわたり李鷺元主任と李静茁現主任の臨床を長時間参観することができた。李鷺教授の名声は吉林省に広く知られ、特に脳血管疾患を得意としている。患者は日本の鍼灸臨床では見られないような難治疾患の患者が多く、病室は患者であふれかえり、効果も卓越していた。脳血管障害による麻痺をはじめ、顔面神経麻痺や交通事故での脳障害では家族が数人がかりで抱きかかえてくる患者など、第一線の医療で鍼灸が効果を

上げている中国の鍼灸医療と日本の鍼灸医療との違いを痛感し、日本鍼灸医療は現状の方向でよいのだろうかと思わずにはいられない。



向かって右、李静茁現主任。左の李鷺教授と

3日目の土曜日には、わたしの講演が組まれていた。第2院の会議室で行われた講演には、主に吉林省鍼灸学会の中医師が参加した。



筆者

演題は1. 日本鍼灸の現状 2. 半身症候鍼灸法の理論と臨床である。

講演時間は午後1時から4時までだったが、実技中心による理論と実際の臨床なので3時間で終わらせるのには苦心した。質疑応答では、中国人の当方スタッフに臨時の通訳をさせたので、細かい部分の説明で困った面もあった。講演では、筋肉反射テストであるTRテストによる正常・異常の診断法をはじめ

め、全般的に大変関心を持たれていた。半身症候鍼灸法の1~2 穴という少数穴治療ということで、一人の女性中年中医師がはなから拒否反応を示していた以外は参加者のほとんどは、大変熱心に受講していた。

臨床披露では、李 鸞 教授の運転手に患者になってもらう。主訴は腰痛、背部痛などであった。参加者の前で数メートル離れたところからの望診により胸椎 8 番の損傷(圧迫骨折)を指摘し、本人の口からも病院でレントゲンにより同じ胸椎 8 番の損傷を診断されていると告げられたことでも参加者の関心が大変高まっていた。

3 時間の講演終了時の李静茁現主任の言葉では、「古代に日本に伝えられた鍼灸法がこのように種々開発されていることが示された。我々中国でも新しい創意により更に発展していかなければならないと思います...」という意味の談話がある。

3 日間の学术交流が終わり、翌日の日曜日是一人、新しく生まれ変わった長春市街を散策してみた。旧満州国時代の旧皇居は以前見学しているのであまり興味がなく、関心があった地質学院(新皇居の建設が終戦で中断され、24 年前に訪問したときには地質学院の校舎として整備途中であった)の現況であり、旧国務院(こちらは戦後白求恩医科大の基礎学部として使用されている)であった。

地質学院は現在吉林大学地質学部となっており、旧国務院は現在も合併された吉林大学白求恩医学部の基礎学部として使用されている。一階の玄関ホールは現在、観光用に開放され旧満州国時代の歴史を見学できるようになっていた。当時の国家要人が利用した重厚なエレベーターは、歴史の重みを感じさせ印象的であった。





遼寧中医薬大学付属医院

その翌日8月27日、長春からの帰路、李鷺教授、李静茁副教授の早朝の見送りを受け、高速バスで果てしなく続く高粱畑の広野を車窓から眺めながら瀋陽へ向かう。

瀋陽到着の翌日、遼寧中医薬大学付属医院を訪ねる。訪中前、知人を通して紹介していただいた教授に急用ができ立ち会えないということで、表敬訪問のみで鍼灸法及び手技治療法の拙著と小生監修のビデオ、DVDを贈呈し帰るつもりだった。

しかし伊凡外事弁主任のはからいで、各鍼灸科病室の医師を紹介いただき、各医師の治療を参観させていただく。こちらの中医学大学付属医院は、知人の紹介であることから、こちらで遠慮して参観は短時間に済ますことにした。

帰国後、参観についての礼状を出しところ、返信で拙著及びビデオ、DVDが臨床資料室に収蔵され、臨床専門家の学習と研究に供している。そして臨床医師が軟部組織損傷の治療において、脊椎療法及び鍼灸療法の方面において優れた医療技術を有していることを理解するに至り、合わせて高度の評価を与えているという内容の文面と、付属医院楊关林院長の言葉と共に今後のあなたとの学術交流や

協力を広げることを望み、訪日の機会があれば訪ねたいとの言葉をいただく。

日中間の鍼灸学術交流が従来頻繁に行われており、この遼寧中医薬大学のみを見ても、日本との間で多くの交流が行われてきている。当然そこには、学べるものと、日本では患者の鍼灸観が大きく異なることなどから導入できないものもある。

しかし、両者が決して同じである必要は無いと思っている。それぞれの国情の違いを超え、鍼灸を大きくとらえ常に斬新な発想を忘れないことが、疾患を抱えた多くの人々のための鍼灸としてより正しい発展が図れると考えている。

平成4年にも洛陽の河南中医学院を訪問し、参観及び脊髄腫瘍手術後の障害患者の治療を披露したことがあった。このときは弱っていた下肢筋力が大幅に改善され、その直前に同じ患者の鍼治療をした中医師の筋力以上に強くなっているの、関心を持って集まって見ていた他の中医師たちも驚きを隠せない様子だった。

このときのわたしの臨床披露では、建物の外から遠隔治療をすると告げ、二人の中医師が同行して建物の外まで付いてきた所で治療をしている

しかし、これらの体験のみで中国全体の中医学鍼灸を判断することはできないが、今回、長春の吉林大学白求恩医学部鍼灸科、瀋陽の遼寧中医薬大学鍼灸科の東北地方2省での中医学鍼灸を参観して、文化革命以降徐々に変化してきた中国での中医学鍼灸が現在どのような状況にあり、これからどのように推移していくのだろうか？その方向性を肌で感じる事ができたと思っている。

社会制度上の問題から、画一的あるいは保守的一面があることは否めないかもしれないが、またそうであるからこそ中医師のなかに、わが国とは違った新しいものに対する関心の強さ及び彼らのなかに存在する洞察力の確かさを見落とすことはできない。そ

これはただ学ぶものの有無のみで判断するものではない。今回の 2 医科大鍼灸科、中医薬大学を尋ねて、鍼灸治療家として鍼灸を更に大きくとらえていかなければならないという感慨を深くした。

今後、さらなる訪問の機会を捻出し、中国での中医師との学术交流を進めて行きたい。それも今求められているのは学より術を中心とした交流である。つまり、鍼灸治療の本領は、医学的根拠の究明より、医療現場での実践にこそあると思うからである。多くの疾患、慢性病が改善できない病院医療的医学で証明されたところでどれほどの価値があるのだろうか？

今、世界中の人々が求めているのは、実際に治るといことである。そして中国中医学鍼灸師との出会いから、真の鍼灸治療追究ための発想上のひらめきを得るために、異なる見方を持つ鍼灸治療家との交流の楽しさを知った旅となったことを痛感している。



遼寧中医薬大学付属医院



遼寧中医薬大学付属医院